

認知症と共に生きる

～過去・現在・未来～

令和
7年

11月24日

振休・月

13:00～16:00

開場12:30 手話通訳付き

会場

東京都健康長寿医療センター 3階会議室 (第二会場: 1階多目的室)

当日先着130名

※定員を超えた場合、第二会場へご案内します。オンライン視聴可能です。

申込不要
入場無料

講演概要

「個別化医療を目指したバイオバンク・ジャパンの取り組み」

東京大学医科学研究所 特任教授 バイオバンク・ジャパン 代表 **松田 浩一**

バイオバンクジャパンでは2003年の開始以降、研究にご協力頂いた約27万人の皆様の血液や病気に関する情報を保管しています。また、提供いただいた血液や情報は、安全に配慮した上で国内の多くの大学や企業の研究者に利用され、利用総数は延べ1000万人分に達しています。これまでの成果によって、多くの病気の関連遺伝子などが明らかとなりました。この研究によって病気のリスク予測や予防、治療薬の開発につながると期待されています。また、現在これらの成果を参加者の方にお返ししてご自身の健康に役立てるための準備もすすめております。今回我々の研究成果や現在進めている取り組みなどについてご紹介します。

「バイオバンク・ジャパンと高齢者 ブレインバンク連携ゲノム研究のもたらすもの」

東京大学大学院医学系研究科遺伝情報学 教授 **岡田 随象**

大容量のゲノム・オミクス情報が出力される時代が到来しました。「誰もが自分達のゲノムを知ることのできる社会」が、自律的に構築されつつあります。遺伝統計学は、遺伝情報と形質情報の因果関係を統計学の観点から検討する学問分野です。数百万人規模の大規模ヒト疾患ゲノム情報を大容量のオミクスデータと分野横断的に解釈し、社会還元するための学問へのニーズが高まっています。バイオバンク・ジャパンを活用した研究成果を含め、遺伝統計学が今後取り組むべき課題を本講演ではご紹介したいと思います。また、「遺伝統計学・夏の学校」の開催など、若手人材育成の取り組みもご紹介させて頂ければと思います。

「アルツハイマー病が採血で診断できる新時代の到来」

東京都健康長寿医療センター脳神経内科 医員
認知症未来社会創造センターバイオマーカー部門担当

栗原 正典

アルツハイマー病は脳内にアミロイド β ($A\beta$)というたんぱく質が凝集した老人斑と、タウが凝集した神経原線維変化を認めることを特徴とし、認知症の原因として最も多い疾患です。これまでは物忘れなどの症状と一般的な画像検査で診断を行ってきましたが20-30%は脳内にこれらの変化がないことが知られていました。近年は抗 $A\beta$ 抗体の登場により、正しく早期に診断することが重要となりました。しかし現在のところPETまたは脳脊髄液検査が必要で、費用や負担の問題があります。近年は通常の採血をして血液を検査することで正確な診断が可能な技術の進歩があり、アメリカでは薬や検査の審査を行うFDAという当局から承認がおりる検査も登場しました。当センターでの取り組みとあわせてご紹介します。

「iPS細胞技術がもたらす認知症・神経難病治療の未来」

慶応義塾大学再生医療リサーチセンター 副センター長
東京都健康長寿医療センター研究所 協力研究員

森本 悟

本講演では、iPS細胞技術が認知症や神経難病の治療にもたらす可能性を紹介します。iPS細胞は患者自身の細胞から病態を再現でき、従来の動物実験では見えにくかった機序の解明と新規治療候補の発見に道を開いています。とくにアルツハイマー病や筋萎縮性側索硬化症(ALS)では、iPS細胞を用いた創薬と個別化医療が前進し、患者ごとに最適な治療選択の実現が視野に入ってきました。再生医療の領域でも、iPS細胞を用いた臨床試験が国内外で進みつつありこれらの技術は患者の生活の質の向上に貢献しうるものです。最新の研究動向や展望について、わかりやすく解説します。

「高齢者ブレインバンク年次報告」

東京都健康長寿医療センター神経病理学 研究部長
高齢者ブレインバンク責任者

齊藤 祐子

私たちの脳は一人ひとり異なる働きを持ち、病気の姿もまた多様です。認知症やパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)などの神経疾患を正確に理解し、治療法を開発するためには、亡くなられた方の脳を調べる研究が欠かせません。ブレインバンクは、そのような貴重な脳を丁寧に保管し、研究に活用する仕組みです。本講演では、ブレインバンクの目的や運営の仕組み、倫理的配慮、これまでの成果を紹介し、皆さまとともに「脳を未来につなぐ」意義について考えたいと思います。